

## 集古会から見る『洪江抽斎』

はじめに

鷗外は、考証家洪江抽斎の伝を立ち上げるにあたって、抽斎と鷗外を思わせる「わたくし」との「奇縁」を強調している。「文章の題材を、種々の周囲の状況のために、過去に求めるやうになつた」「わたくし」は、「徳川時代の事蹟を捜」るため、「武鑑を検する必要が生じた」。武鑑を蒐集する過程で目にしたのが、「弘前医官洪江氏蔵書」と云ふ朱印である。そこから、「わたくし」は洪江氏の探索を始め、この朱印にある洪江氏が『経籍訪古志』（安政三年成立）を書いた洪江抽斎であり、名を道純といたつたことに辿り着く。

『洪江抽斎』（東京日日新聞）大正五年一月二三日～五月二〇日「大阪毎日新聞」大正五年一月二三日～五月一七日「その三」から「その九」には、「わたくし」と抽斎の武鑑を巡る「奇縁」から、嗣子保と対面するまでの経緯が、詳細に語られている。

こうした経緯が語られる背景として、一つには作中「その二」に述べているように、「抽斎は現に広く世間に知られてゐる人物ではない」という認識がある。確かに、洪江抽斎や伊澤蘭軒など、鷗外の描き出した考証家たちは、一般に著名な人物ではなかつた。先行論においても、鷗外の史伝は、歴史に埋もれた人物たちに光を当

てたものとして、評価されてきた。

村上祐紀

しかし、一部のの人々にとって、洪江抽斎は決して歴史に埋没した存在ではなかつた。集古会に集つた人々である。彼らは、鷗外が洪江抽斎と出会う以前から、抽斎を含む考証家の事蹟を探っていた。例えば、彼らの機関誌であつた『集古』には、三村清三郎、横尾勇之助共輔による「蔵書印譜」（『集古』明治三十六年三月～昭和四年一月）が連載されていたが、『洪江抽斎』連載開始以前の明治四十四年一月、既に洪江抽斎の蔵書印が紹介されている。そこには、「洪江氏珍玩『洪江叢書』という二種類の蔵書印の図が載せられており、抽斎の簡単な伝が書かれている。以下に全文を引用する。

洪江道純

名全善字道純号抽斎世弘前医官安政五年戊午八月廿九日歿享年五十四葬谷中三崎南町観応寺（傍線は論者による。以下同じ）

ここには、『洪江抽斎』冒頭で問題となつた情報がつとに載せられている。蔵書家であつた洪江氏が、抽斎と号し、字は道純であつたこと、弘前藩の医官であつたこと、墓が谷中の「感応寺」にあること、である。鷗外が、この「集古」の記事を目にしたかどうかは

定かではない。しかしながら、こうした情報が既に公にされていたという事実は、冒頭の抽齋探索の場面の意味合いを変える。集古会を視座として考えた場合、鷗外はもともと大きな枠組みの中で、抽齋以下多くの考証家たちを見出していった可能性が示唆される。近世の考証家であった洪江抽齋を、鷗外がこの時期に発掘し論じる意味を、考証家を眼差す広い動きの中で捉える必要性が生じてくるのである。

以下に見ていくように、集古会の活動は考証家の研究だけにとどまらない。集古会の活動を視野に入れて、『洪江抽齋』を読んだとき、鷗外『洪江抽齋』だけでは見えてこなかった、洪江抽齋を扱う意味が見えてくるはずである。

#### 集古会の学問体系

集古会の会誌「集古」に集った人々を論じたものとして、山口昌男「内田魯庵山脈（失われた日本人）発掘」（平成一三年一月、晶文社）が挙げられる。集古会やその周辺に集っていた人々の情報は、本書によって明らかにされている。本節では、集古会の沿革や人間関係については本書の情報に基づきつつ、さらに集古会の果たした役割や同時代的な意義について考察を加えていきたい。

集古会は、明治二十五年、坪井正五郎主唱のもとに林若吉、山中共古、清水晴風らが参加して設立された。「集古会規則」に、「本会ハ談笑ノ間ニ史学考古学ノ智識ヲ交換スルヲ目的トシ其レニ関スル器物書籍書画等ヲ蒐集展覽シ且ツ会誌ヲ発行ス」と述べられている

ように、集古会は会員の持つ書物や智識の交換を目的に発足された会である。彼らが持ち寄ったのは、学問的な物に止まらず、玩具や武具、絵など多様な物たちであった。

「会誌『集古』の内容については、『鷗外雑誌細目集覧一』（昭和四九年九月、日本古書通信社）中、「集古」の欄に、以下のような説明がある。

集古の内容は考古学、史学を主とした学術的且趣味的な記事で、貴重文献の翻刻、古書画典籍解題、書物や人物に就ての考証、随筆等みのがせない書誌である。又長年にわたつての蔵書印譜、近世華押譜、江戸商牌集などの連載も特色の一つといえよう。

集古会に見られるような学問の場合は、江戸時代後期にはたくさん存在した。清野謙次は、江戸時代における学問研究の連絡方法として、個人の通信、学術集談会、著作の三点を挙げている。その内、学術集談会については、「志を同じうし、趣味を等しうせる人々が相連絡して、其発見事項、研究事項を通信し合つた外に、期日を決めて一定の場所に標本を携へて会合し、各自意見を交換するし、又親睦の助けとした。」といい、当初は趣味の集まりであったものが、次第に様々な会へと発展していったと述べる。先に見た集古会の目的やその活動内容に鑑みるに、集古会の人々は、こうした近世の文人達の学問の集まりの延長に自身を位置づけていたといえる。

彼らの念頭にあったであろう会の一つに、山口昌男が「神話的原型とその反復のごとき関係」と指摘する耽奇会がある。耽奇会は、

山崎美成を中心とした好古、好事家の集まりであり、文政七年五月から翌八年十一月にかけて、月一回計二十回開催された。各自が所有の古書画、古器財などの珍品奇物を持ち寄り、展覧し、批評するという会であった。耽奇会の参加者は、画家の谷文晁、国学者で蔵書家として知られる屋代弘賢、滝沢馬琴など、錚錚たる顔ぶれであったという。会の記録の集成である『耽奇漫録』第一集（文政七年五月一五日開催）には、山崎美成の序文が掲げられている。

ふるき物は日々にそこなはれ、遙けきものはつねに稀なるものなれば、いとえがたくなん、ざるを好みを同じうする友の、これかれひめもたるも少からねど、折にふれ事によらざれば見ざるも亦おほかり、過しころ打かたらふことのついでにいへるは、各おさめたらん書に画に、および調度めくもの、珍きを、月毎に数を定め、もち出て互にうち見つ、おのれくがおもひよれるふしをいひ出なば、いかにうれしかるわざならずや、かつむかし今のはれるさまをも見、あだしくにのならばしをもしるたつきなるべき、これを飛耳長目の学びとも云べし。

ここでは、品物を持ち寄って、語り合うという江戸時代の学問研究の特徴と通じる耽奇会の目的が述べられている。こうした会での交流を通して、人々の知は集積され、組織化されていった。集古会は、近世の知のあり方を意識した上で、成立し、展開したのだといえよう。

ただし、当然のことながら、近世の知の延長にあるといっても、

集古会は明治時代に結成された会である。彼らの考証、随筆からは、江戸時代の文化の記録・保存という目的を明確に見ることができると。

例えば、明治三十三年から開催された「山ノ手談話会」における彼らの立場を見てみよう。「山ノ手談話会」は、正確には集古会の催しではないが、そのメンバーが重なっていることから、集古会の立場にも通じるものであると考える。「山ノ手談話会」は明治三十三年十月から明治三十五年九月にかけて、全二十四回行われ、口述筆記が「同方会報告」（明治三十四年四月）明治三八年（二月）に掲載された。その冒頭に掲げられた以下の文章からは、「山ノ手談話会」の趣旨や意義を窺うことができる。

而して明治も爰に卅有余年、当時少壮気鋭の士も、今は鬢髮霜白きを覚ゆるの年輩たり、まして所謂古老は日に月に凋落し、且つ土人の異動甚しければ、随而土地の口碑伝説逸話等は、今にしてこれを拾集するに非ざれば、漸く滅び行かんこと必せり、

「山ノ手談話会」は、山ノ手の町内の様子についての記憶を座談することを通して、再現するというものであり、会の趣旨は、「滅び行かんこと必せり」である江戸の名残について、口述筆記によって残していこうというものであった。同時に、「今にしてこれを拾集するに非ざれば」という認識からは、明治の世の中から近世を客観的に評価し、捉え直そうとする眼差しを見ることができると。

以上、集古会について、彼らが自らを近世の知の延長として位置

づけていたこと、近世の文化の記録・保存を目指していたことを明らかにした。旧幕臣によつて結成された同方会とメンバーの重なりが見られたように、集古会の活動は内部にとどまらず、同時代において広がりを見せている。次節では、こうした集古会の人々のネットワークについて考えていきたい。

### 集古会のネットワーク

こうした近世への眼差しは、集古会に限らない。集古会のメンバーも所属していた、あるいは関わりのあつた団体にも共通して見られるものである。

例えば、明治の末年には、失われていく名家の墓を探索、保存しようという会があつた。武田信賢を中心とした東都掃墓会は機関誌「見ぬ世の友」(明治三三年六月〜三五年一〇月)を発行、大槻如電を中心とした探墓会は機関誌「あふひ」(明治四三年五月〜七月)を発行し、その活動を報告していた。「名家墳墓の移動」(「あふひ」三、明治四三年七月)と題した記事には、探墓会が「考古学者、歴史学者、古典研究の篤志家等」によつて結成されたこと、「古來著名の墳墓が往々其跡跡を止めず其所在を失ふに至りなん」という経緯が結成を促したことなどが記されている。東都掃墓会には、山中共古や坪井正五郎も名を連ねており、また武田信賢は集古会に積極的に参加、寄稿する会員であつた。また、武田は探墓会にも参加しており、大槻如電も同じく集古会の一員だつた。それぞれの団体の活動からは、失われていく近世の名残を様々な形で残していこうと

いう意図を共通して指摘することができる。

さらに、時代は下るが、大正七年には「武蔵野に於ける自然と人文とを学び、また武蔵野に於ける趣味を養はんとする」という目的のもと、雑誌「武蔵野」(大正七年一月〜昭和一八年二月)が刊行されている。この雑誌は、集古会の試みを考える上で見逃すことのできないものである。まず、「武蔵野」には集古会为中心的に活動をしていた人物の名が散見される。鳥居龍藏、山中共古をはじめとして、三村清三郎、沼田頼輔、尾佐竹猛、中島利一郎、三田村篤魚などが参加している。これらの人々が鶴外の史伝執筆にあつたつての情報提供者であることも注目に値する。また、鳥居龍藏の述べる「本会は単に狭き一種の専門家の会合ではない、広く武蔵野を中心として各方面より研究的に、將た趣味的に之を究め味はんと欲する」という「武蔵野」を記録していこうとする趣意も、集古会に通底するものであるといえよう。

ここでは、集古会と人脈の重なる集まりにおいて、共通した過去への眼差しを指摘することができることを指摘しておきたい。彼らが行つていたのは、単に趣味や好事という言葉では片付けられない、近世を考証する学問であつたのである。このことは、集古会の成り立ちを考えれば、より明らかになるだろう。

集古会の始まりについては、幹事を務めた三村清三郎が、会員名簿「千里相識」(「集古」昭和一〇年九月)に付した沿革史において次のように述べている。

何でも坪井博士が人類学会では堅過ぎるから、少しくだけた集

をしやうといふので、当時の若手を発起人にして、明治二十九年一月五日後から上野の時の鐘の下の韻松亭で、集古懇話会を開催した。

ここに述べられているように、集古会は人類学、考古学といった学問では扱いにくいものを調査対象とすることに特徴があったようである。彼らは、蔵書家であると同時に、古銭、玩具、甲冑、蓑、紋章などに詳しい人々であった。

明治時代の考古学発達の経緯を述べた、八木静山「明治考古学史」(「ドルメン」四・六、昭和一〇年六月)は、発足当時の考古学界を、「博物館派」「大学派」「集古会派」の三つに分類している。その上で、「要するに集古会は一種古物趣味者の娯楽場でありましたが、併し人類学会や、考古学会が、儼然たる衣冠束帯の人物とすれば、集古会は宛も家庭内の主人公が横になりながら女房や、子供と楽し気に語る、裏面の状態でありますから、矢張り考古界全体上より観察して、大に必要な会合と申さねばなりません。」と述べる。山口昌男は、集古会を「野のアカデミー」と位置づけているが、集古会の活動は、むしろアカデミズムと表裏一体の関係であったと言つてよい。それは、同様に八木が、「集古会も矢張り考古学会と同様、人類学教室から生れたと申て宜しい」と述べていることから窺える。

周知のように、考古学という学問の名称が使われるようになったのは、大正二年に高橋健自が「僅々二十三年を出でぬ」というように、西洋の学問が流入した近代になってからのことである。それ以前に

は「古物学」などと呼ばれていた。考古学が学問として確立する上で大きな役割を果たした坪井正五郎<sup>15)</sup>は、考古学について「古物古建設物遺跡等に関する実地研究を基礎として当時の事実を正確に推考するを務めとする学問なり。」と述べ、調査対象を「古物古建設物遺跡等」に限定していった。考古学の対象が限定されたことによつて、そこから抜け落ちてしまった対象を扱う集古会のような人々が、傍流として位置づけられていったのである。

つまり、考古学という学問が立ち上げられつつあった過渡期において、アカデミズムとしての考古学と、集古会は明確に区別されたものではなかった。発足当初の考古学に対する考え方として「世人は大抵人類学とは斯る古物研究と心得て居つたのであります。」といわれているように、発足当初の両者は、成立においても、活動内容においてもつながっていたのである。

一方、考古学が確立するにつれて、集古会の人々は、アカデミズムの学問では扱うことのできない、幅広い分野を研究対象としていった。学問を限定しなかったからこそ、人物関係も多岐にわたり、他分野の学問を対象とした様々な集まりとの交流も見られた。こうして集古会のような学問の体系は、考古学とは異なる形で定着していった。鷗外が史伝の情報提供者として交わつた人々も、こうしたネットワークに属していた人々である。彼らの探索方法には、単に興味の対象が類似していたという以上の符合が見られる。

鷗外が、資料や史実の真偽を確かめるため、集古会の人々と頻繁に連絡をとるようになるのは、史伝執筆開始後のことである。しかし、本稿で問いたいのは、直接的な人間関係のあり方ではない。史

伝に見られる方法意識や発想が、集古会の人々の発想と極めて似通っているということを指摘したいのである。そして、おそらくそれは、論じる対象と無関係ではない。抽斎を扱うことが、結果として、両者の方法意識の類似を導いたのだといえる。

### 蔵書家の発掘

集古会が、抽斎やその他の考証家を探っていたのは、近世の文人たちの知のあり方を引き継ぎ、残していこうというモチベーションによるものだった。それは、失われつつある江戸の面影を、語るることによって残していこうとする「山ノ手談話会」の態度と通底するものと捉えられる。

江戸時代後期には、多くの蔵書家が存在し、それを貸借したり、会説したりすることによって、知の交流を図っていた。岡村敬二<sup>17</sup>は、こうした江戸時代の蔵書家の一例として、屋代弘賢、小山田与清、近藤正斎、狩谷掖斎を挙げている。そして、蔵書家の死というものを通じて、彼らの蔵書は残るが、「ひとびとの博覧、生き字引き、生き証人の記憶、というものは消え」てしまうという点を指摘している。

江戸時代後期に存在した蔵書家たちの知のあり方は、西洋の学問の影響によって、少なからず変わっていった。考古学や人類学という学問が立ち上げられたことによって、そこでは扱えない対象が生まれたように、である。集古会は、変化を受け止めながら、一方で継承していく立場を採った。まさに、集古会は、散逸した書物や物

を収集し、考証するという作業を行うことによって、近世の文人たちの「記憶」を残していったのである。

近世では著名な蔵書家であったにも関わらず、死後、その名が埋もれてしまっていたという人物は、<sup>18</sup>洪江抽斎以外にも多数存在した。確かに洪江抽斎は、まとまった伝も立てられず、偉業は長く伝えられずにいたが、一方で菩提寺に墓石が存在し、子孫も生存していた。鷗外が、抽斎の嗣子保の手による材料に基づいて『洪江抽斎』を執筆したことは、周知の通りである。

これに対して、墓石すら所在不明になっていた蔵書家として、尾崎雅嘉を挙げることができる。尾崎雅嘉は、解題書『群書一覽』（享和二年刊）の著者として知られる。同時に蔵書家としても著名であり、大阪の木村兼葭堂とも交流があった。雅嘉存命時、「国学者としての尾崎雅嘉の名を知らぬものはなく、大阪に限らず、「全国的に高名」な人物であった。

しかし、死後、大量の蔵書は散逸し、墓石は所在不明となった。こうして死後忘れられていた尾崎雅嘉は、明治期に再発見されていく。その発掘に尽力したのは、大阪の古書店主鹿田松雲堂と幸田成友である。幸田露伴の弟としても知られる幸田成友は、集古会にも出入りしていた歴史家である。東京で集古会が成立し、文人たちの事蹟を発表していた頃、同じように、大阪においても忘れられた過去の人のびとを探索する活動が進行していた。雅嘉を発掘する幸田の姿には、抽斎を発掘した鷗外を重ね合わせることがができる。

幸田は、尾崎雅嘉発掘の経緯について、次のように述べている。

我等読書生の中に、『群書一覽』の作者として尾崎雅嘉を知らぬ者はあるまい。併し雅嘉の伝記としては従来『古学小伝』又は『近世三十六家集略伝』にある位で、委しいことも知れず、墓は大坂口繩坂の春陽軒に在るといふものの、墓石さへ分らなかつたのである。幸に墓石は雅嘉の六十六年忌に相当する明治二十五年の秋、本堂の背後に打捨ててある無縁碑中から発見せられたので、書肆松雲堂鹿田静七氏が発起人となり、同志に詢つて墓石を本堂の南西角に移し、周囲には石垣を廻らすこととなり、工事成就の後、雅嘉の祥月命日に当る十月三日を期して盛な祭典を行はれた。<sup>(19)</sup>

尾崎雅嘉が生存中の高名に比して、死後長く忘れられた存在になつていたことは、幸田の述べるところから窺える通りである。明治三十四年より、大阪市史編集に関わつていた幸田は、鹿田が積極的に進んで行つていた雅嘉の顕彰事業に参加、また同じく鹿田が中心となつた大阪での古書陳列会「保古会」<sup>(20)</sup>にも、主要なメンバーとして名を連ねていた。鹿田は、古書的重要性を啓蒙する立場から、大阪の文人発掘に積極的であつた。尾崎以外にも、大塩中齋、萩原広道、木村兼葭堂、山川正宣等の建碑を主唱した。幸田が関わつていたこうした活動には、集古会と同様に、大阪における文人たちを発掘し、残していこうという意識が働いていたに違いない。

存命中における、夥しい蔵書数と文人としての業績に対する敬慕や崇拜の念が、人々を埋もれた文人たちの発掘へと突き動かす。おそらく、過去の文人を顕彰するにあつて、このような道筋が一つ

の定型となつていたのであろう。鷗外の洪江抽齋を語るこの意味も、こうした活動の延長上で考えていく必要がある。

従来、『洪江抽齋』は、鷗外の抽齋に対する共感に基づいて論じられてきた。鷗外が自身の置かれた境遇に「不平」を抱いていたという見方は早くから論じられており、この「不平」の感情を『洪江抽齋』執筆のモチーフと捉える諸論が積み重ねられてきた。<sup>(21)</sup>しかしながら、そこでは、あくまでも鷗外が抽齋とどのように向き合つたかという問題に限定されてきたように思われる。

例えば、小泉浩一郎<sup>(22)</sup>は、先行の「不平」というモチーフを踏まえた上で、「埋もれた学者抽齋の生の発掘、考証学という非政治の学統の追尋の中に〈秩序〉による呪縛からの解放を夢見た鷗外」を捉え、それはまた維新史を構築するという企図によつて「思いがけず自己をなお規制しつづける〈政治〉や〈秩序〉の影に脅かされる」ことになつたと指摘している。

作中において、抽齋に対する追慕や敬愛の感情が繰り返されることからも、鷗外が抽齋に好意を抱いていたことは疑いない。しかしながら、『洪江抽齋』執筆以前から活動していた、集古会やその周辺の人々の言説を視野に入れて考えたならば、鷗外が抽齋を見出していった意味は変わってくる。抽齋は、残すべき近世の知の体現者として、集古会やその周辺の人々に認識されていた。抽齋を調べ、書くことの意味は、既に鷗外が『洪江抽齋』に着手する以前に形成されてきたのである。

ここから、従来の鷗外研究においては自明のものとされてきた、抽齋への共感の内実を明らかにすることができるのではないかと考

える。近世の考証家たちを論じる同時代の場の中で、鷗外はどのようなモチベーションから抽齋や蘭軒を見出していったのか。そもそも、なぜ鷗外は集古会の人々に接近していったのか。こうした問いを解決していくことが、本稿を踏まえた上で今後の課題となる。

### おわりに

集古会との距離を測る傍証として、「山中共古記念号」と題した「武蔵野」の記事について触れておきたい。本号は、集古会で中心的な役割を果たした山中共古の死去にあたって組まれた追悼号である。「武蔵野」の幹事、編集主任を務めた中島利一郎は、「巻頭の辞」を述べているが、そこに鷗外の名が散見される。まず、中島は、「徳川時代の学者」として新井白石、貝原益軒を挙げ、両者を対比的に論じている。「常に独善を期して、動もすれば其の才を恃むに過ぎ、自ら権勢に居らんことを欲した。」白石に対して、益軒は「飽くまでも自ら卑うし、克く人に譲つた。」と言う。その上で、鷗外を白石に、共古を益軒になぞらえて、次のように述べるのである。

吾人は明治、大正、昭和間に於ける森鷗外博士の、鮮やかにして且つ大きくし学問的業績を見て、敬仰の念措く能はざるものがあると同時に、鷗外博士は、どうも白石型の人物であつたやうに思はれた。そこにアカデミツクの色彩が濃厚に動いてゐた。而して明治、大正、昭和年代に、近代的の貝原益軒を求めたならば、それがわが山中共古翁ではあるまいか。

ちなみに、中島利一郎は黒田侯爵家記録編集主任を務め、宮内省で『明治天皇御記』の編纂にも携つたという人物であり、鷗外との関わりも深かった。鷗外の史伝にも情報提供者として、その名が登場する。鷗外と学問上の交わりのあつた中島が、このように鷗外と共古の対比を述べているということからも、両者の学問には、相隔たつた部分があつたことを窺わせる。

鷗外が史伝を執筆する中で、情報提供者として、集古会の人々と交わつたことは確かである。今後は、その上で、鷗外が集古会の人々にどのような価値を見出し、何を利用していったのか、ということを明らかにしていかなければならないだろう。その手がかりとして、『洪江抽齋』以下史伝執筆を巡る具体的な人間関係を検証していかなければならないが、それについては別稿で論じることとしたい。対象と方法意識に類似性が見られるからといって、両者が同一のものであつたかという点、そうではない。集古会の人々が、「少なくとも従来（註）の文学史のなかでは十分に位置づけて来られなかつた人である。」と述べられているように、彼ら自身が時代に埋もれてしまつたのとは対照的に、鷗外の史伝は現在に至るまで読まれ続けている。

本稿では、単独で論じるだけでは見えてこなかつた、『洪江抽齋』成立の背景や、作品を取り巻く状況を明らかにしてきた。そうした視野は、従来の通説を問い直す契機となり、また鷗外の史伝の持つ意味を考える上での手がかりともなるはずである。



## 注

(1) 『洪江抽齋』に先行する、抽齋伝は、田口卯吉編「大日本人辞書」増訂第六版(明治四二年六月)中「洪江抽齋」、足利衍述編「徳川時代無聞の学者第四十一回」(「日本」明治三五年九月一九日)があるのみである。「伊澤蘭軒」「その二」に、先行する抽齋伝に関する記述が見られる。

(2) 例えば、小堀桂一郎「森鷗外—文業解題 創作篇」(昭和五七年一月、岩波書店)は、伊澤蘭軒について「敢て言へば明治の世には学史の行間に埋没したやうな名前」とした上で、「鷗外が抽齋に次いで蘭軒の事蹟を探索し、その伝を立てようと思ひ立つた時、蘭軒は先づ大凡この程度に、つまりどう見ても不当なほどに世にその眞価を知られざる人として彼の眼に映つてゐた。そしてそのことが同時に、鷗外をして蘭軒伝の執筆に向はしめた動機の一半でもあつた。」と述べる。

(3) 三村清三郎、横尾勇之助共輯「蔵書印譜 其四十四」(「集古」明治四四年二月)

(4) 鷗外は集古会の会員ではなかったが、明治四十三年の「会員名簿」(「集古」明治四三年三月)には鷗外の弟森潤三郎の名が見える。また、潤三郎は「集古」に「洪江抽齋父子の雑記発見現存せる抽齋の著述」(「集古」昭和一年一月)と題した、「洪江抽齋」を補足する文章を投稿している。

(5) 「集古会誌」(明治二九年一月)。なお、本誌は「集古会記事」、「集古会誌」、「集古」、「集古会報」と誌名の改題が度々行われている。本稿の引用では、当時称していた誌名に従っている。

(6) 清野謙次「第八篇 学問研究の聯絡機構」(「日本考古学・人類学

史上巻」昭和二九年九月、岩波書店)

(7) 引用は、「日本隨筆大成・第一期別巻 耽奇漫録 上」(平成五年二月、吉川弘文館)による。

(8) 「山ノ手談話会」を機関誌に掲載した同方会は「本会ハ旧幕臣タリシモノ、子孫ヲ以テ組織シ交互智徳ヲ研磨シ友誼ノ親密ヲ謀リ兼テ吾人ノ風氣ヲ發揚スルヲ以テ目的トス」(「同方会規則」同方会報告「一、明治二九年六月」とあるように、榎本武揚を中心に旧幕臣やゆかりの人々で結成された会である。山口昌男は、前掲「内田魯庵山脈」において、集古会の人々を「旧幕臣か、敗け藩の出身者、またはその系譜を継ぐ者、江戸の町人の流れ」であると見、同方会との重なりを指摘している。

(9) 明治三十三年十月、山中古宅にて開催された第一回の参加者は、坪井正五郎、鳥居龍蔵、関保之助、武田信賢、岡田村雄、林若吉、五十嵐雅言、室賀車山、広田華洲、とある。

(10) 既に拙稿「森鷗外『西周伝』論」(「小山工業高等専門学校研究紀要」四二、平成二二年三月)で述べたことがあるが、明治二十二年頃から、江戸期の社会、文化や江戸幕府を再評価する動きが相次いで起こっていたことに触れておきたい。「山ノ手談話会」の掲載された「同方会報告」もそうした動向から発刊された機関誌の一つである。

(11) 鳥居龍蔵「本会の設立と雑誌発行の趣意」(「武蔵野」一・一、大正七年一月)

(12) 注11に同じ。

(13) 高橋健自「考古学」(大正二年七月、聚精堂)

(14) 斎藤忠「学史上における坪井正五郎の業績」(「日本考古学選集

2 坪井正五郎集上巻」昭和四十六年七月、築地書館」には、「思うに、當時における史学は、古典を尊重し、史実の考証に重きをおかれ、過去の人びとの文化や生活の究明はとかく看過されがちであった。一方、考古学がようやく文科系の学問の中にそだてあげられたとしても、とかく風俗史や有職故実的な研究、あるいは珍品収集等、好古的な傾向から脱却することは困難であった。このような風潮の中にあつて、坪井の考古学研究の態度は、力強く刺戟をあたえ、考古学の地位を確立し、広く認識させた。」と述べられている。

(15) 坪井正五郎「考古学の真価」(『考古学会雑誌』八、明治三〇年八月)

(16) 前掲、八木静山「明治考古学史」

(17) 岡村敬二「江戸の蔵書家たち」(平成八年三月、講談社選書メチエ)

(18) 鹿田文一郎「尾崎雅嘉について」(『上方』一四、昭和七年二月)

(19) 幸田成友「尾崎雅嘉」(『書籍月報』六八、明治三八年六月)、引用は「幸田成友著作集第六巻」(昭和四七年五月、中央公論社)による。

(20) 中尾堅一郎編「保古会出品目録」(昭和五七年一月、中尾松泉堂書店)参照。本書は、明治三十八年五月に発行されたものを復刻したものである。

(21) 唐木順三「鷗外の精神」(昭和一八年九月、筑摩書房)、平岡敏夫「歴史小説と史伝・森鷗外」(『国文学 解釈と鑑賞』臨時増刊、昭和三五年一〇月)、三好行雄「解説」(『近代文学注釈大系 森鷗外』昭和四一年一月、有精堂)など。

(22) 小泉浩一郎「『洪江抽齋』論—小説ジャンルの崩壊と終焉」(『別

冊国文学・森鷗外必携』平成元年一〇月)

(23) 中島利一郎「巻頭の辞」(『武蔵野』一四・二三、昭和四年九月)

(24) 紅野敏郎「逍遙・文学誌」(119)、「武蔵野」山中共古記念号—鳥居龍藏・中島利一郎・三田村篤魚・山田一・川島つゆ・三村清三郎ら」(『国文学 解釈と教材の研究』四六・六、平成一三年五月)

付記「『洪江抽齋』の作品名は『洪江抽齋』に統一した。本文は『鷗外 歴史文学集 第五巻』(平成一二年一月、岩波書店)に拠る。旧字は適宜新字にあらためた。